

温帯性針葉樹林の保存・復元に向けた取組 - 森林生物多様性復元地域 -

第3回管理委員会

開催日時 及び場所	平成27年3月11日(水) 13:00～ 中部森林管理局 大会議室
管理委員	<p>青山 節児 (中津川市長)</p> <p>飯尾 歩 (中日新聞社 論説委員)</p> <p>池田 聡寿 (池田木材(株) 代表取締役社長)</p> <p>植木 達人 (信州大学農学部 教授)</p> <p>大浦 由美 (和歌山大学観光学部 准教授)</p> <p>大住 克博 (鳥取大学農学部附属フィールドサイエンスセンター 教授)</p> <p>岡野 哲郎 (信州大学農学部 教授)</p> <p>下嶋 聖 (東京農業大学短期大学部 助教)</p> <p>杉田 久志 (森林総合研究所四国支所 産学官連携推進調整監)</p> <p>田上 正男 (上松町長)</p> <p>増田 今雄 (信濃毎日新聞社 編集委員)</p> <p>山本 進一 (名古屋大学 名誉教授)</p> <p>横山 隆一 ((公財)日本自然保護協会 参事) 管理委員13名出席 五十音順</p>
議事内容	<p>(1)「木曾悠久の森」管理基本計画－取組方針(案)－について</p> <p>(2)今後のスケジュールについて</p>
概要	<p>○ 管理基本計画－取組方針(案)－について、案どおりでよいことへの了解が得られた。</p> <p>○ 委員からの主な意見は次のとおり</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・この取組は、地域最大の目玉と考え、そのような話もしてきている。そのためにも、温帯性針葉樹について正しい知識を持つことが必要と考えている。</li> <li>・生物多様性の保全は、それがあ地域だけの問題ではない。都市部に住むそれに興味がないという人を減らすということがメディアとしての役割だと思う。</li> <li>・住民にPRをして、世界に発信出来るようにして欲しい。木曾ヒノキを伐らないということではなく、利用しながら保存・復元していける取組になることを期待している。</li> <li>・木材生産が当たり前であった木曾で、生物多様性・地球温暖化等の国際的に活発な議論がされるようになった中で、この取組がまとめられたことは意義がある。課題は沢山あるが、先進的な取組であり、議論が深まっていくことを期待する。</li> <li>・この取組が、森林の持つ生物多様性のストーリーを考えるきっかけになればと考える。スギ・ヒノキは花粉症から嫌われ者になっているが、世界的には非常に貴重で、この取組を通してその歴史を広く国民にPRしていくことは必要と考えている。</li> <li>・国有林が地域に軸足を置いて進めることに意義がある。地域をどう巻き込んでいくか、実行の体制が重要である。</li> <li>・復元について課題があり、取組区域外であるが、来年度50年誌を作成する三浦実験林の成果が活かされていければよい。</li> <li>・自然と人の関係を見つめ直す取組で、人が変わっても取組が継続していける体制づくりが重要である。</li> <li>・技術的なものはこれからであり、絵に描いた餅とならないように、これまでの失敗例や成功例を踏まえて試験研究を進める必要がある。</li> <li>・この地域が下流域に貢献してきた歴史をPRしていくことと、地域住民にこのような貴重な財産があることを知らせていく必要がある。</li> <li>・木曾地方にはラン科の植物が豊かであるが、そこにこのような貴重なすばらしい森林があることを見て感じる事ができた。これを発信していく手立てを考えていく必要がある。</li> <li>・計画書に書いてあることを誰がやるのが非常に大変で重要なこと。都会の人に、役立つことができる機会をつくっていく必要がある。既存の知見の統合と再評価をまずやるべきと考えている。</li> <li>・森を造るということは、木を植えることだけではない。森が自分で生まれ変わり世代交代をしていくにはどうしたらいいかを考えていくことが重要と考えている。</li> </ul>

